

2月号の内容

中高の経済教育はいま第2回（市場経済の授業）

2011年4月から雑誌『経済セミナー』に連載されている「中高の経済教育はいま」をニューズレターで、順次再掲しています。今回は第二回の山本雅康先生執筆の「市場経済を中学・高校で教えるには」とコメントを掲載します。

連載「中学・高校の経済教育」第2回
—市場経済を中学・高校で教えるには—
山本 雅康（奈良学園中学高等学校）

はじめに

私は、現在私立の中高一貫共学校で中学社会と高校公民科を教えている。経済分野の学習は、中学3年と高校2年で行っている。中学3年生では、教科書に準拠しつつ6年制のメリットを生かし高校での学習を視野に発展学習を導入している。高校2年生では、教科書に加えて大学入試を意識しプリントを用いながら展開している。

自主性を尊重した自由な校風のなかで、生徒たちの学習や自主活動に対する意識が高い。「政治経済はあまり得意じゃないですが、これからもよろしくお願いします」などと真摯な態度で授業に臨み、質問にくる生徒も少なくない。校内外の催しにも積極的に参加し、過去に日経 STOCK リーグ高校部門賞受賞やエコノミクス甲子園全国大会準々決勝進出を果たしている。「経済がニュースなどでよく取り上げられている現代において、この学習は将来に必ず役立つと思いました」と授業の感想を述べる生徒もいる。以下主として高校の授業における実践を報告したい。

希少性と効率

経済的な見方や考え方を学ぶことにより、社会のしくみやあり方、相互の関係や影響・作用などについて理解が深まると考える。中学や高校で学習すべき経済的なものの見方・考え方とは、一言で言えば「合理的な意思決定」であろう。教育現場で生徒に求める「情報リテラシー」や「主体的な進路選択」は、ここから生まれる。そのため、問題を設定しそれを解いていく学習を重視している。「プリントや教科書を見ただけではなかなか理解できなかったが、問題を解くことで理解しやすくなってきている。」という生徒もいる。設問例と解説の形で、授業でどのようなことに留意しながら教えているかを報告する（注1）。

【問題 A】 次の文章を読み、以下の問いに答えよ。

「(ア) 費用 (コスト) と (イ) 効果 (便益)」が、経済の原則である。活用できる資源は (ウ) があり、すべての人を満足させるほどには存在しない。有限な資源をどのように配分すれば最も適当な結果が得られるか、費用と便益を考え (エ)。経済活動では、「他の人々を犠牲にすることなく誰かの暮らしを良くするようなあらゆる機会が活用し尽くされているとき」、ムダがなく (オ) であると言われる。社会や次世代のため、(ウ) をもつ資源はできるかぎりムダを省いて (オ) に利用しなければならない。そうでなければ、「もったいない。」(環境保護でノーベル平和賞受賞のマータイさんが感激した日本語)。

資源を使って生産されたモノや《B》に《C》が付き商品として《A》で売買されるシステムを《A》経済という。《A》経済では、《C》の働きに導かれ費用と便益の原則にもとづき (カ) ことによって (オ) に資源を配分し、私たちの暮らしを良くしようとする。1993 年に中国が憲法に「社会主義《A》経済」を明記し、《A》経済により急激に経済を発展させている。

【問 1】 《A》～《C》に入る最も適当な語を答えよ。

答えは、A 市場、B サービス、C 価格。

【問 2】 (ア) と (イ) に入る語の組み合わせとして最も適したものを次から選べ。

- ① ア最小・イ最大 ② ア最小・イ最小
③ ア最大・イ最大 ④ ア最大・イ最小

答えは①。第一志望の大学に浪人せずに現役で合格する方がよいと受験競争の厳しさを「最小費用」「最大効果」を教える。(注 2)

【問 3】 (ウ) と (エ) に入る語の組み合わせとして最も適したものを次から選べ。

- ① ウ過剰性・エ必ず選択が行われなければならない
② ウ希少性・エ必ず選択が行われなければならない
③ ウ過剰性・エあれもこれもすべて行うべきである
④ ウ希少性・エあれもこれもすべて行うべきである

答えは②。資源については、文化祭で活用する資源は何かということから、労働(「人手」「人材」)や土地・資本(「教室」「設備」)など生産要素について説明している。希少性は、近年注目されているレアメタルや水資源の例がわかりやすい。

希少性と合理的選択について、さらに、「時間」制約で考えさせたい。私の学校は、勉強とクラブ活動・文化祭などの自主活動の両立を目標としている。優先順位をつけ学習計画を立て(時間を最適配分し)、集中して(効率的に)時間を使うことにより充実した学校生活がおくれる。

【問 4】 (オ) と (カ) に入る語の組み合わせとして最も適したものを次から選べ。

- ① オ一律的・カ競争する ② オ一律的・カ競争をやめる
③ オ効率的・カ競争する ④ オ効率的・カ競争をやめる

答えは③。授業では、携帯電話やインターネットの利用料金が競争によって下がり利用しやすくなったことなどを例にしている。

【問 5】 下線部に関連して、「すでに支払っていて取り戻すことのできない費用」であるな

らば、「将来の行動を決めるときには無視すべきもの」と考えるのが、経済の原則からみて合理的である。このような考え方にもとづく行動の例として適当なものを次から二つ選べ。

① コンサートの前売り券を家に忘れて会場に来てしまった。楽しみにしていたので、あらためて当日券を買ってコンサートを満喫した。

② アメリカの大学院に留学する計画をたて高額の入学金を払った。その後、日本の大学院の方がやりたい研究ができることを知り、入学金は戻ってこないが、日本の大学院に進学した。

③ 食べ放題バイキング会場に入った。急に体調が悪くなったが、無理をして高額そうな品ばかりを選び、支払った料金分と思われるまで食べ続けた。

④ 中学時代テニス部に属して練習に打ち込んだ。もともと音楽に興味があり、高校では音楽活動をやるつもりだったが、道具や経験をムダにしたくなかったので音楽活動をあきらめテニス部に入部した。

答えは①と②。授業では sunk cost について「覆水盆に返らず」を紹介し、公共事業を例に説明している。授業後しばらくして、大手電器メーカーが映像機器の価格競争に敗れ撤退を決めると株価が上昇したニュースをしらせに来てくれた生徒がいた。戦略的な見方・考え方は、少し脱線して「婚活」を例にすると生徒たちは乗ってくる。担任していたクラスで「シグナル」が合言葉のようになったことがある。

今回は省略しているが、機会費用についても、放課後アルバイトすればその時間に勉強ができなくなる例や少子化の背景には、子育てにかかる経費だけでなく、仕事や私生活で犠牲にするものの大きさがあることなどの例を用いて出題している。また、「限界的決定」に関して、高3のどの段階までクラブ活動を続けるか文化祭で新たに前夜祭を行うかどうかの例で、合理的な選択について考えさせている。

市場機構と効率性

(1) 分業と交換の効率性

私たちの社会では、個人の資質、能力、希望などによって職業を自由に選択し、その職業に専念することにより生活できる。生活が成り立っているのは「分業と交換」のおかげである。分業の効率については、小学校の学級担任制と高校の地歴公民科の教科担任制とを比べて簡単に説明する。

歴史や地理の学習でも、分業と交換の観点は重要である。私の学校からそう遠くないところに平城京西市の遺跡がある。古代の律令国家でも市場が必要だった。また、チベット高原の過酷な自然環境のなかでの人々の暮らしを交易が支えていることを話す(注3)。

交換の場である市場については、全国各地の卸売市場で毎日様々な生鮮食料品が短時間で大量に売りさばかれ、最終的には家庭の食卓に並んでいる例がわかりやすい。不特定多数が取引していると想定された抽象的な市場については、インターネット上の市場に例えるとイメージしやすい。労働市場についても、働く側(労働者)が供給、雇う側(主に企業)が需要であり、賃金が価格であることを説明しておきたい(注4)。

(2) 価格の自動調整作用と効率

社会科の学習＝丸暗記という固定観念をもってしまっている生徒が残念ながら少なくない。需要曲線と供給曲線により市場機構のメカニズムを理解していくことは、モデルを使って社会の相互関係や作用について考える貴重な機会である。「経済は数学的要素が若干からなので面白い。」や「考えるほうが楽しい。」と興味をもつ生徒もいる。

まず、簡単な需要表と供給表を使って需要曲線と供給曲線を板書してみる。曲線上の動きは、縦軸の価格の変化→横軸の数量の変化であり、逆から考えてはいけないことを強調する(注5)。そして、超過供給・超過需要→均衡価格という価格の自動調整作用について

説明する。政府などによる価格統制が資源を浪費し非効率であることも教えたい（注6）。

（3）需要曲線・供給曲線のシフトと効率

「諸価格の相対的な変動を通じて、希少な資源の効率的な配分が達成されることになる」（注7）。授業では、価格以外の条件の変化で需要曲線や供給曲線がどうシフトするかを板書しながら具体的に説明している。複雑な制度の説明とは違い、例題を解いて一般的な原理を理解しその原理を諸条件にあてはめていく学習は、生徒には目新しい。「需要曲線と供給曲線は結構わかっておもしろいです。」と感想を述べる生徒もいる。その一方で「ややこしい。」と感じる生徒もいる。生徒の理解はどの程度のものか。センター試験の問題を解いた後の生徒の振り返りをもとに検討する。

【問題 B】 ある商品の市場において、商品の人気がなくなったため需要曲線が移動し、新たな均衡状態に達したときの価格と取引量はどのように変化するか（注8）。

「人気がなくなる→同じ価格でも需要量は減る→需要曲線は左下に移動→よって供給曲線と交わる場所が変わる→価格は低下、取引量は減少。」「需要・供給曲線のシフトについての知識のうえで、問題文をしっかりと読み、頭の中でシミュレーションできた。」というように授業の例をマスターした生徒なら正解できた。また、「人気がない商品は高いと買わないので値段が下がる。たくさん仕入れても売れないと赤字になるので取引量は減少する。」というように経済活動についての常識で考え正解した生徒もいた。

【問題 C】 出荷に際しガソリンに炭素税を課す場合、消費者の事情に変化がないとすれば、課税後のガソリンの需要曲線・供給曲線の新たな均衡点はどこになるか（注9）。

「税金により価格は上がるが企業にお金が入るわけではない→以前と同じ値段でも企業の取り分は少ないので供給量は同値段であっても減る→供給曲線は左に動く→均衡価格は左上に。」「消費者の事情に変化がない→需要曲線に変化がない。ガソリンに炭素税を課す→コストがかかるので供給曲線が左上にシフトする。よって曲線の接点が均衡価格になる。」というように問題1同様、学習できている生徒は正解できた。また、「ガソリンに税金を課すとガソリンの価格は上がる。買うことのできる量が減る。」「税は政府への負担であるので価格を上げると供給・需要量が減る。」というように経済活動についての常識で考え正解した生徒もいた。

問題B・問題Cとも、生徒の出来からみて妥当でこの程度までは入試問題として出題されてもよいだろう。ただ、問題Bで「人気がなくなったら価格が低下するのはわかったけど価格が低下したら取引量は次に多くなっていくかと思ってしまった。」問題Cで「価格が上がってもガソリンは生活必需品なので数量は減らない。」「税がついて価格が上がって取引量が減るのでまた価格が下がると思った。」などというように、経済活動についてある程度わかっている生徒が間違ってしまうことも認識しておきたい。

今回の授業紹介はここで終わるが、このほか、大学入試問題を使って社会的余剰と効率、市場の失敗（注10）の学習を行っている。今後もこのような問題演習により、経済への興味・関心を高め生徒が経済的な見方や考え方を獲得できるように努めていきたい。

〔注〕

- 1 問題Aは、クルーグマン(2007)を参考にし、同書から「効率」「サックコスト」の記述を引用している。
- 2 別の機会には、「苦労や失敗は、あきらめなければ後になって必ずいきる。ムダにはならない。」と語ることもある。
- 3 分業と交換が資源を効率的に利用し生産性を高めることについては、国際貿易でリカードの比較生産費説を教える際に強調している。個人間でも各人がそれぞれ相対的に生産性の高い(比較優位の)仕事に就けば(特化すれば)全体の所得が増える。世の中持ちつ持たれつで、特別にすぐれた人の力だけで成り立っているわけではない。信頼関係やコミュニケーションの大切さを社会のしくみから学習することに意味があると思う。
- 4 労働は制度や歴史的経緯を詳しく取り上げるためなのか、最も大切な分野の一つであるにもかかわらず生徒は苦手になっている。労働市場についてしっかり認識させたい。生徒には、理系文系の進路選択に関連させて次のような話をしている。仕事は自分だけでは決められない(需要供給の相互作用)。自分の希望や適性という供給側の視点も大切だが、需要側からも考えよう。職場で必要とされるよう自分に力をつけ、その力を発揮すること(その対価が賃金)が大切だ。医師は、高度な知識や技能が必要だが、それを発揮できる病院・医療チームとその力を求める患者さんがいて初めて評価される。プロスポーツ選手も同様で報酬(価格)が高いのは、本人の努力と才能の賜物であるとともに、ファンのおかげでもある。なお、仕事について具体像を示すには、NHK教育テレビの番組「あしたをつかめ平成若者仕事図鑑」が活用できる。
- 5 需要が多いと価格が上がるので需要曲線は右上がり、供給量が多いと価格が下がるので供給曲線は右下がりと混乱してしまう生徒もいる。中学や高校で需要曲線や供給曲線、均衡価格について教える「費用と便益」について議論を積み重ねていくことが必要である。
- 6 価格規制については、文化祭での模擬店を例に考えさせている。上限価格規制の場合、文化祭実行委員会が外来者を喜ばそうと極端な低価格を模擬店に強いたらどうなるか。供給不足となり行列ができ、品質も悪くなる。
- 7 高校教科書である佐々木毅他(2010)からの引用。
- 8 大学入試センター試験 2010 年度「現代社会」本試験第 5 問の問 3。需要曲線・供給曲線および均衡状態の価格・取引量が図に表示され、価格と取引量の変化が選択肢で示されている。
- 9 大学入試センター試験 2010 年度「政治・経済」第 5 問の問 4。需要曲線・供給曲線および均衡点が図示されており、新たな均衡点を図中の 6 つの点から選ぶ。
- 10 学校教育で「市場の失敗」が強調されているという大竹(2010 年)の指摘を現場の課題として受けとめたい。また、教える側が「市場の失敗」を必ずしも市場機能の阻害や非効率の問題として認識できているとはいえない状況にあると思う。
独占や寡占について、生徒のなかには、「寡占→企業は自分たちの利益が一番よく得られた状態を維持したい→競争が起こらず本来なら人気のある方へと客が流れるのにそれがない→競争をおこさないといけない→新規参入の促進」や、「一定の利益を保った価格のままで資源が効率的に分配される動きは起こらない」というように答えられる者もいる。その一方で、「一社が強くなり資源がその一社に集中する」とか「寡占とは一部の人や会社とその商品において大きな権利をもつことなので資源が公平に配分されることはない」とらえる者もいる。また、「独占状態だとどんな価格を設定しても販売数は安定しているので、価格が高いほど売り上げも高くなると思うのですが」と疑問をもつ者もいる。OPEC の例などで説明しているが、完全競争よりも生産が低下し効率が損なわれる場合があることを高校生に理解させるのは難しい。

参考文献

- 大竹文雄 (2010) 著『競争と公平感』中央公論新社 p 64-74
ポール・クルーグマン/ロビン・ウエルス著 (2007)『クルーグマン ミクロ経済学』大山道広訳、東洋経済新報社 p 8-24、p 202-203
佐々木毅他著 (2010)『現代社会』東京書籍 p 85

(『経済セミナー』No. 660, 2011, 6・7月号より転載)

山本実践の特徴

経済学をベースとした経済教育の実践例

山本の報告から浮かび上がる特色は、次の4点にあると考えられる。

①中高一貫という特色を生かした実践であること

山本の授業は、私立の一貫校という有利な条件のもとでの実践である。しかし、報告に「教科書に準拠して」とあるように、公立の学校でも発展学習が可能なところや、公立中高一貫校では、このレベルのものを追求することが可能であることも示している。

②経済学の知見をベースとした経済教育の実践であること

内容は、学校が大学進学を前提としていることもあり、ハイレベルである。それは、テスト問題Aのベースがクルーグマンであることにもあらわれている。また、現在の学習指導要領では扱われていない、コスト概念（ sunk cost、機会費用）や限界の決定を学習させているところにもあらわれている。さらに、受験を視野にいれて、センター試験を活用した問題B,Cを、市場メカニズムの理解の確認問題として使っているところにもでている。他にも、市場経済の授業では、効率性をキーワードに、分業と交換、価格の自動調節作用、需給曲線のシフトなど、教科書でも扱われている概念や理論をさらに深める指向の学習が展開されていることにもあらわれている。このように、しっかりとした経済学の理解を踏まえた経済教育を目指していることが、二番目の特色である。

③見方や考え方を深めようとする姿勢をもっていること

同時に、山本実践では、受験知識や多くの経済知識を与えることだけでなく、見方や考え方を深めることが意識されている。それは生徒に身に付けさせたいものとして「合理的な意思決定」能力をあげていることから伺える。それを中学段階から高校まで一貫して意識して実践しているところは、教える側がしっかりした目標をもっていることからくる。経済的な見方や考え方（economic way of thinking）を育てることは、大学での経済学教育の導入という点からも、また市民として経済活動を担うという点からも大事な視点である。その意味では、山本の授業は、大学での経済学教育を視野に入れつつも、市民教育としての経済教育からも授業を進めるという、いわば、二兎を追っている実践である。

④生徒の経済理解が困難である箇所を浮かび上がらせていること

山本の報告は、生徒の理解プロセスを丁寧に分析している。正解にたどり着いた生徒を、経済理論をしっかり理解したグループと、生活感覚（常識）で正解にたどり着いた生徒と分けて考察しているところは注目に値する。また、生徒が理解しにくい箇所や誤解しやすい箇所の指摘も大事である。後者の例では、注5にあげられている、「需要量と需要」の違いがしっかり理解できていないことによる誤解や、注10の独占や寡占に関する指導の難しさを指摘している箇所が注目に値する。これは、生徒が理論を理解しにくいというだけでなく、中高教科書の記述のそのものが不正確だったり、古い理論をひきずったままであったりしているという背景がある。その点で、高等学校までの経済学習には、経済学者の協力を得て、指導法や教科書の記述を至急に改善する箇所があることが示唆されている。

以上4点の特色をあげたが、山本の授業は、受験や理論ばかりのガチガチなものではなく、経済学と他教科との関連や、学校生活や進路選択での経済の知見が有効であることの指摘など、幅広さを伺わせるものとなっている。山本は所属校の校風を「自主性と自由さ」と紹介しているが、山本自身からも同じ風が吹いてくるような実践であると感じられる。

（小石川中等教育学校 新井 明）

編集後記

■新春号につづき、2月号をお送りします。

■今号では、前号に引き続き、雑誌『経済セミナー』の連載論考を転載いたしました。今後も、掲載順に発行後半年を超えた論考を順次掲載の予定です。

■ニュースレターの形式でこの種の情報をお送りすることがよいのか、試行錯誤の連続です。レイアウトも毎回変えています。季報となっていますが、実質不定期刊となっています。手作りの組織のよさと問題がでていと反省をしています。ご意見をいただければ修正してゆく所存です。

■今年に入って、例年になく厳しい寒波襲来です。インフルエンザの大流行は幸いにしてないようですが、それでもマスク姿がもう当たり前になりました。私も実はマスクマンなのです。マスクの経済人類学的考察ではありませんが、実用と仮面の二つがマスクにはあると感じながら、街を歩いたり、学校で生活したりしています。皆様はどうか。

(新井)

Network for Economic Education

季報: 経済教育をネットワークに!

年4回発行
発行人・篠原総一
編集人・新井 明

経済教育ネットワーク
101-8360 東京都千代田区三崎町 1-3-2
日本大学経済学部 2号館
Tel: 03-5259-9070 / Fax: 03-5259-9075
メール: contact@econ-edu.net

経済教育に関する情報の収集と発信でワンストップ・サービスを提供する
<http://www.econ-edu.net>